

第四章 古代社会の終焉

第一節 八幡信仰と修験道

一 八幡信仰と宇佐

八幡の由来

「八幡」の語源は、通常「ハチマン」と呼ばれているが、『日本霊異記』によると「ヤハタ」と言うのが本来呼び名であるという。大分県宇佐市南宇佐にある宇佐八幡宮は、もともと宇佐の地名は付けていなかったらしく、「八幡大神」、「八幡神」、「八幡神社」、「八幡神宮」等と言われ、貞観元年（八五九）石清水勧請以後、区別する意味で冠頭に地名を附したと言われている。文献上に見える八幡は、『続日本紀』天平九年（七三七）夏四月乙巳朔条に

遣使於伊勢神宮。大神社。筑紫住吉。八幡二社及香椎宮。奉幣以告新羅无禮之。

とあり、八幡という名は『古事記』、『日本書紀』等には記載されていない。以後、中央政権（平城京）との急速な接近により、文献上の記録も増加し、脚光を浴びることとなる。

・弘仁六年（八一五）『東大寺要録』四中に、大神朝臣清麿

の解状が記されており、八幡神を「大菩薩」といい、応神天皇を「御霊」としている。

・承和十一年（八四四）『石清水文書』二（宇佐八幡神宮弥勒寺建立縁起）があり、一〇〇九年ごろ八幡宮の禰宜をしていた辛島勝によって作成されたといわれる。

「宇佐八幡宮弥勒寺建立縁起」の一部内容は以下のとおりである。

欽明天皇の時代に、神は宇佐郡の辛国宇豆高島に天降り、大和などを遍歴したあと、馬城嶺に初めて現れたという。しかし、神はなお遍歴して、酒井泉社（宇佐市辛島）、宇佐河（駅館川）の渡りの社（瀬社）、鷹居社へと移る。この時神は、鷹となって心荒く、人々を多く殺害したので、辛島勝乙日（乙目カ）が、崇峻天皇三年（五九〇）から三年間、その心をやわらげるため祭った。天智天皇時代に小山田社（宇佐市小向野）へ移り、神亀二年（七二五）正月二十七日には、辛島勝波豆米への託宣に基づき、今日の社地へ移座したという。

『東大寺要録』も最後の所は、今日の菱形小椋山社に移ったことが記されている。いずれにしても欽明天皇時（六世紀後半ごろ）に八幡神は現れ、鷹となって人々に荒ぶる神となり、神亀二年には現在の南宇佐の地に落ち着いたと思われる。

八幡神が宇佐に入った経緯については、辛島氏の進出と言われている。八幡神が入る以前、宇佐地方には土俗的な農業信仰があり、海氏や宇佐氏豪族などが馬城峯の巨石を神体とする祖

神社が祀られていた。そこに朝鮮半島から辛島氏祭祀集団が進出してきたといわれる。

宇佐の神々

宇佐氏の成立は、記紀によると宇佐国に「宇佐津彦・宇佐津姫」の兄弟神がいて、兄である宇佐津彦を神武天皇が宇佐国造（宇佐国造宇佐津彦命）に任じたことが記されており、その祖神を『国造本紀』は「タカミムスビノカミ」としている。また、『延喜式』では、

- ・八幡神（大菩薩・応神天皇霊）
- ・比売神（神武天皇の母玉依り姫霊）
ひめ おわたらし
- ・大帯姫（神功皇后霊）

の三神を祀っているとされている。ただし、大帯姫は『弥勒寺建立縁起』等によると、弘仁十四年（八二三）からの祭祀であるから、もともとは八幡神と比売神の二神であつたといわれる。中野幡能『八幡信仰史の研究』によれば、先に記した巨石と比売神は深い関係にあり、『日本書紀』垂仁天皇二年によると、豊後国国前郡の比売語曾社女神は、白い神石から化身したという。

その後、宇佐氏については『続日本紀』養老五年（七二二）六月三日条に、法蓮の三等以上の親に「宇佐君姓」を賜った記事が見える他には、宇佐氏系図に頼る他はないといわれている。宇佐氏が豊前地域で活躍した時代の五・六世紀は、地方古代国家が成立し、豊前国田河地域もその一つで、香春岳に韓

神（香春神）が祀られた。この神は、辛国息長大目命といい、新羅の神様で亀卜・鍛冶・採掘など大陸と深く関わりを持ったシャーマン神であつたらしい。そしてこの神は後に、辛島氏による銅山シャーマン信仰と宇佐信仰とが融合し、八幡信仰の初形態が整つたといわれている。八幡神の出現に関する伝説は、『東大寺要録』や『扶桑略記』等に記されている。

厩（馬城）峯と菱渕の池の間に鍛冶の扇が出現した。そこで、おおがのひき 大神比義が絶穀して三年籠居し、神の顕現を祈つたところ、三歳の小児が竹葉に立つて託宣し、八幡神であることを告げたという。

注意しなければならないのは、この伝承に幾つかの留意点があることで、一つには「鍛冶」言葉で、宇佐地域には「金屋・鍛冶屋名」などの字の他、製鉄遺構が多く発見されている。また、大神氏の道教的な呪術的な性格が認められることである。

八幡信仰と氏族

（朝臣）・辛島勝・宇佐君の三氏がいる。

大神氏は、御許山おんもとの東山麓に向野（山香町）という地名が残っており、そこを根拠地として活躍していた。大神氏は律令時代に、国東半島や別府湾と大和（難波も含む）を結ぶ海上交通路に依拠し、大和三輪山を祭祀とする大神氏（大三輪・三輪君）と深く関わりを持つていたらしく、辛島氏を抑えて八幡神を皇室関係のものへと転換させたという。その大神氏の痕跡は『正倉院文書』大宝二年（七〇二）の「豊前国戸籍帳断簡」中に、

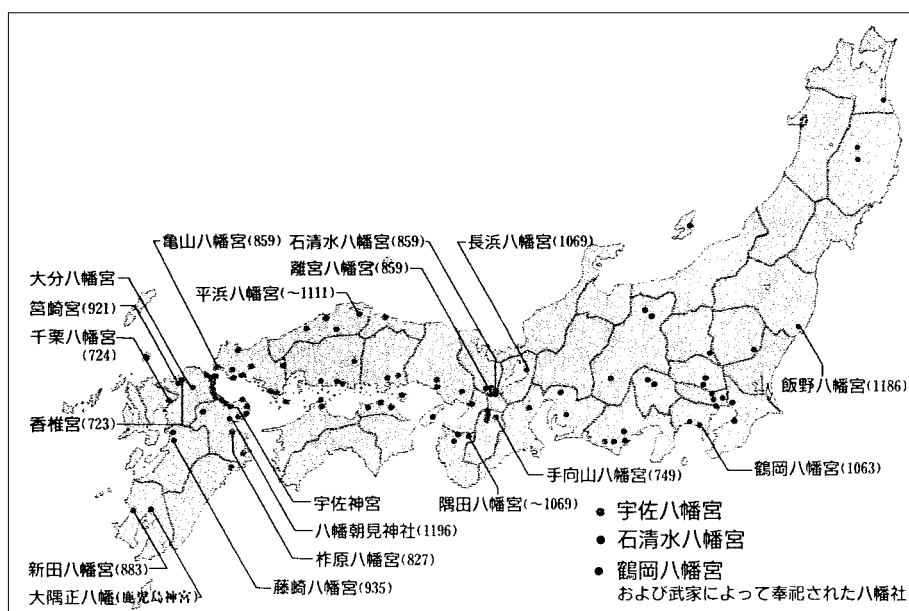


図3—30 『八幡信仰の広がり』（週刊朝日百科『日本の歴史』54より転載）

「大神部」の名が記され、更に福岡県朝倉郡三輪町にある式内社於保奈牟智神社は「おんがさま」（大神さま）という名が伝えられている。更に、最近の発掘調査において、大野城市「牛頸窯跡群」の窯跡から須恵器に「大神君」と陰刻された人名や、佐賀県白石町の多田遺跡からは「大神部」と書かれた木簡が発見されるなど、考古学的にも資料が蓄積されつつあり、大神氏の活躍した足取りが想定される。

辛島勝氏は宇佐郡辛島郷を根拠に活躍した。朝鮮系のシャーマン（巫女）を中心とする祭祠集団で、神との対話を重ねながら人々に融合し、時には恐れられ、祭祀を実施することが執拗に繰り返されたといわれている。この辛島郷内には前述した法鏡寺が存在し、法隆寺系瓦や川原寺系瓦を出土し、畿内と深い関わりを持っており、辛島氏の氏寺と推定されている。

宇佐氏は前項で記したように国造家で、他の二氏に比較してなかなか目立たない存在だった。つまり、宇佐氏は祭祀に対して直接的な主体者でなかったのである。実際には養老五年（七二二）の法華の三等以上の親に宇佐君姓が与えられたところから宇佐氏の始まりと見られている。中津市相原に存在する相原廃寺跡がこの宇佐君の氏寺と想定されている。

法蓮僧と八幡神

『託宣集』に見える法蓮僧は、宇佐八幡宮の神宮弥勒寺の初代別当であるといわれ、大宝三年（七〇三）に豊前の荒野四〇町が与えられている。こ

の褒章は、彼の実績に対するものか否か定かでないが、鷹居社の成立以前に、隼人政策を担う人物として宇佐の地に居住していた可能性が強く、また、法蓮は医術に精通しており、その方面での褒章ともいわれている。養老四年（七二〇）に起きた隼人の乱の時、豊前国司宇奴男人に率いられた軍が八幡神を奉じて、宇佐の地から大隅方面へ向かったとされている。法蓮は医術に優れていたとされ、この隼人の乱において彼は軍医として活躍した可能性が高いことがあげられる。『託宣集』には「三角の池」周辺の野仲郷の地に薬草が幽深としていたと記されており、法蓮僧に関与したものである。令の規定では僧尼に認められた医術は、仏教に基づく呪文・湯藥・道教的呪術の行使であったという。

こうして、八幡社は天平三年（七三一）に官幣社として朝廷の直接支配を受けるようになり、神宮寺とされている法鏡寺や虚空蔵寺は弥勒寺へと発展するようになる。後に八幡神は朝廷（平城京）に迎えられ、上京した巫尼大神杜女おみわのもろめは従四位下、主神司大神田麻呂は従五位下に任ぜられ大神朝臣の姓を授かったが、数年後に二人は失脚させられてしまうのである。続いて、宇佐公池守うさきみいけのかみと辛島勝与曾女からしまかつよそめが任ぜられ、道鏡の支持を受け、神護景雲三年（七六九）道教を神託として奉じたが、これも後日追放となってしまう。宇佐八幡宮の朝廷接近は活発な託宣活動により再び復活を見せ、八幡神と仏教との神仏習合体の先駆

的現象を見るようになる。

二 修験道と遺跡

豊前国では、修験道遺跡として豊前市求菩提山をあげることができる。

求菩提山の信仰

求菩提山は、北部九州の豊前市大字求菩提に位置する。標高七八二メートルの山で、犬ヶ岳

（一一三〇メートル）を主峰とする大日岳・小屋岳・経読岳・飯盛山・国見山の連山から成る山々の一角に求菩提山は存在する。

求菩提山の歴史は古く、平安時代後期（十二世紀前半ごろ）からとされているが、『求菩提山雑記』によれば、

豊前国求菩提山は神靈奇譚を示し給う山にして往古は絶頂常に奇雲たなひき夜毎に金光起こりて衆峰を照らす遠近是を仰ぎ見て奇異の思ひを成幾春秋なるとをしらす是偏に神明降臨の徳を顕し玉ふ故地なり其金光の起し候所を今繕に辰口と言って石間に穴あり此穴より出る氣いと暖にして三冬といへども其邊り今に到りて積雪なし

とあるように、古来から神霊の給う山として奉られ、山頂の上宮には国玉神社とその背後に巨石群が鎮座していて、その辰口から金光を発していたと解される。金光は火山の作用があったらしく、最近まで水蒸気が出ていたとも聞いているが、山岳信仰は自然発生的なものであり、その発生現象に神霊と融合して崇拜の念が生まれたものとも考えられる。